

【論文】

弘前大学校地の近代考古学 旧第八師団司令部と旧制弘前高等学校

上 條 信 彦

1. 本稿の目的

明治5（1872）年、日本初の鉄道が新橋-横浜間で開通した際、海上に線路を敷くために造られた近代化遺産のひとつである「高輪築堤跡」（東京都港区）が、令和3（2021）年、国史跡に指定されたことは記憶に新しい。近現代考古学は、発掘調査や型式学といった考古学的手法を用いて、過去の生活の再構成や解釈を行うことを目的とするが、特に文献史料の乏しい地域や記録を残さなかった階層、日常生活に関わる事項に対して、新たな歴史解釈を加えることができる（桜井2004）。こうした流れのなかで、特に戦跡の場合、記録を残すことにより、後世への平和教育の材料としても利用されている。弘前大学文京町キャンパスには大正9（1920）年設立の旧制弘前高等学校（現、青森県弘前市文京町1番地、以下旧制弘高）と、日清戦争後、明治31（1898）年に設置された陸軍第八師団の司令部、旅団司令部、憲兵隊（現 同・文京町3番地）があった。これら当時の建造物は、戦後の昭和24（1949）年、新制弘前大学の校舎として使われていたが、昭和30～40年代の新校舎建築に伴い、その全てが解体、現存するものはない。文献史料に関しても、敗戦時における焼却などで残るものは限られる。弘前市域では旧軍関係施設を近代化遺産として、活用が図られているものもあるものの、建築史・文化財的調査は限られ、かつ周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外ということもあり、考古学的な調査例はない。一方、旧軍施設の跡地が新制大学校地になった例は多く、東北大学や岡山大学、鹿児島大学など、他の時期の発掘調査に併って旧軍関係の資料が調査されることもある。近代における教育や軍制の象徴的な建物ともいえる旧制高等学校校舎、師団司令部庁舎は、全国的にみても現存するものは少ないものの、その価値が見直され、活用が図られている例も少なからずある。このような観点から、弘前大学構内は、戦跡考古学、近現代教育史双方から見て貴重な場所といえよう。

そのようななか、令和2（2020）年度、キャンパス内の古い給排水管の取り換え（ライフライン再生）工事が行われた。工事は校舎間を縫うように掘削される予定であることから、キャンパス内の地下の状況を確認する数少ない機会と認識して、施設環境部の協力のもと工事の立ち合いができた。この調査に併せて、現農学生命科学部にあった第八師団司令部に関する資料を調査した。本稿では、近代考古学の試みとして、本工事に係る出土品と残存する古写真、古文献を総合的に解釈することで、校地の近代を明らかにする。

コンロ用の素焼きの丸型熱板である。電熱線であるニクロム線を溝にはめ込む。実験器具としても利用される。9～15はガラス製の実験器具である。9～11は容器類で、9は薬品瓶、10は三角フラスコ形瓶、11は摺合せ瓶蓋である。12は、形態の特徴からアルコールランプと判断される。13は試験管、14はガラス棒、15はガラス管である。このように、会館地点では食器類と実験器具が主であり、学校ならではの構成を示す。

2-2 コラボ地点出土の弘前大学資料

コラボ弘大と理工学部南棟の間である。土坑1基を検出した。外構タイルを剥がし、幅70cm、深さ1mを掘削したところ、その覆土からみつかった。土坑は径3mほどで、陶磁器、鉄製品、プラスチック製品を含み、焼土で充填される。この状況から、本土坑は野外焼却跡もしくは焼却物の一括廃棄土坑とみられる。図2-16～27および写真1下段に、陶磁器9点、ガラス製品3点を図示した。16～24は磁器、25～27はガラス製品である。16～20は盃で、全て同型品である。盃は口縁が外に開くタイプで内面の底に「清酒 酔樂」と印字される。21は皿か鉢である。内面底に「弘前大学」と印字される。22は湯呑茶碗で印刷による絵付がある。23・24は理化学用品である。23は径12cmの磁製乳鉢である。24は径14cmの磁製鉢である。25・26は牛乳瓶である。紙キャップ式で、側面下の「㊤ 180cc」のエンボスから2点とも容量180ccである。25のラベルは橙色で正面に「MILK 明治牛乳」、裏面に「明治バター」と記される。26は洗浄時に印字が剥げ落ちてしまったが、緑色のインクで、上段に「厚生省許可特殊栄養食品」、中央に「栄養強化天然果汁 登録商標 NKA ダイヤ」と読めた。27はガラス管に白色の繊維が充填されている。実験装置の一部とみられる。コラボ地点の出土品は、実験器具に加え、飲料に関わる資料が多い。

3. 出土品からみた旧制弘前高等学校～弘前大学の日常

上記出土品の来歴を検討する。旧制弘高の建物配置図に、現在の建物配置図を合わせたのが図3である。これをみると、会館地点は旧制弘高時の化学実験研究室棟（大正11年築）の北側に当たる。この棟は、新制弘前大学設置後も昭和40（1965）年の理学部発足まで、弘前大学文理学部の化学教室として使用されていた。また会館地点の西（現 教育学部校舎）には、男子寄宿舍（北溟寮：大正10年築）があり、寄宿舍事務室奥には食堂があった。

会館地点出土食器類からは、使用者や使用時期、その用途を知ることができる。なかでも口縁に沿って緑二重線がある食器類と、「大學」印字の湯呑が目される。緑二重線の食器類は、いわゆる国民食器と呼ばれる硬質陶器で、戦時中に統制陶器として規格化が進む。国民食器は、工場・学校の集団給食など労働者の衛生状態に対する関心が高まった大正期に生産されるようになった（美濃窯業株式会社2002）。瀬戸陶磁器工業組合1935『定款並ニ定款施行細則』86頁には「圧口食器（磁器） 二本筋入現品通注文によりマークを付すことあり」（舟橋2015）とあり、「日陶連」や「岐陶工連」それぞれで、規格が統一化された。昭和12（1937）年の日中戦争を機に、戦争遂行のための物資の確保、統制が強化され、昭和15（1940）年には、日本陶磁器工業組合連合会の定款

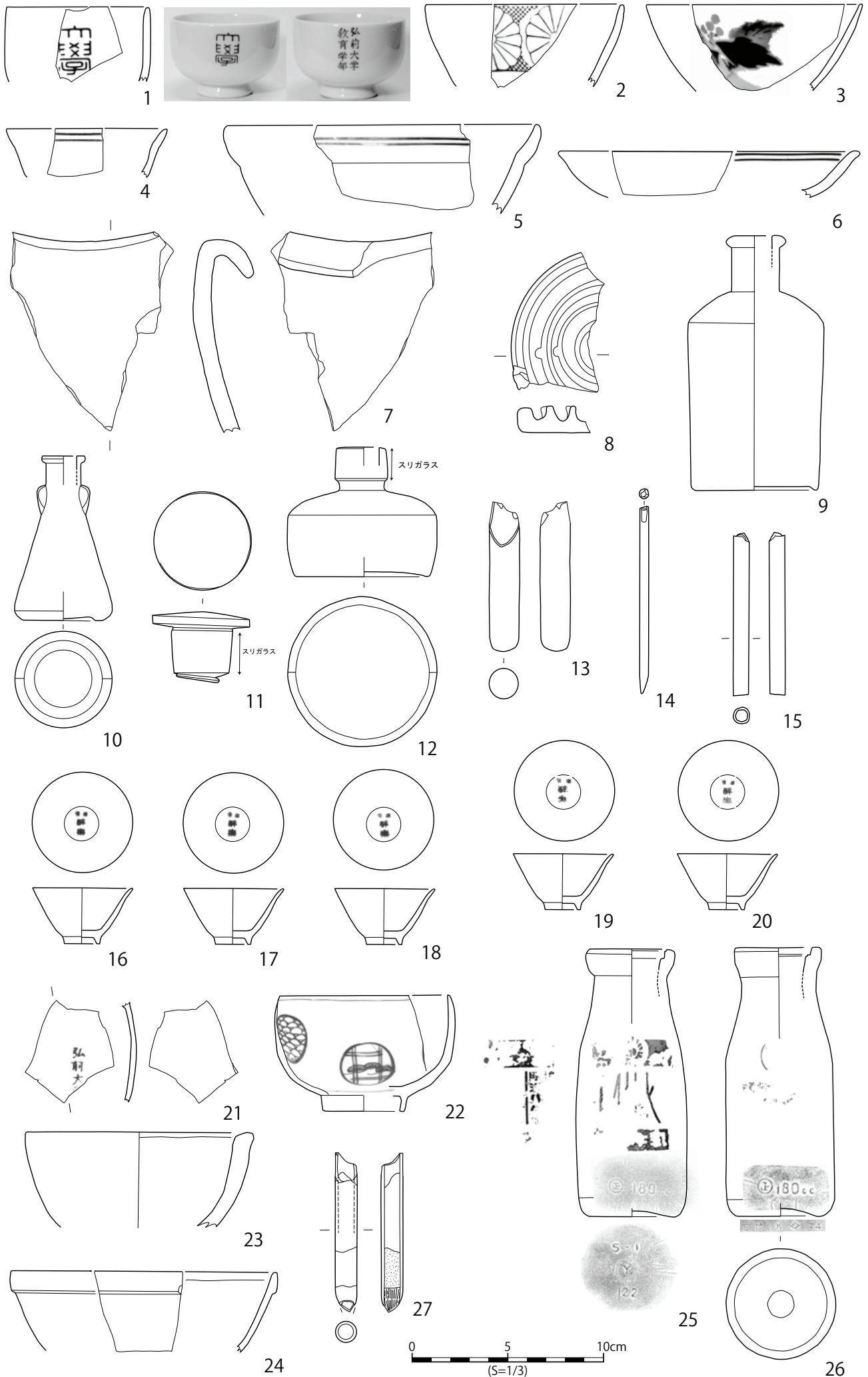


図2 会館地点、コラボ地点出土品実測図

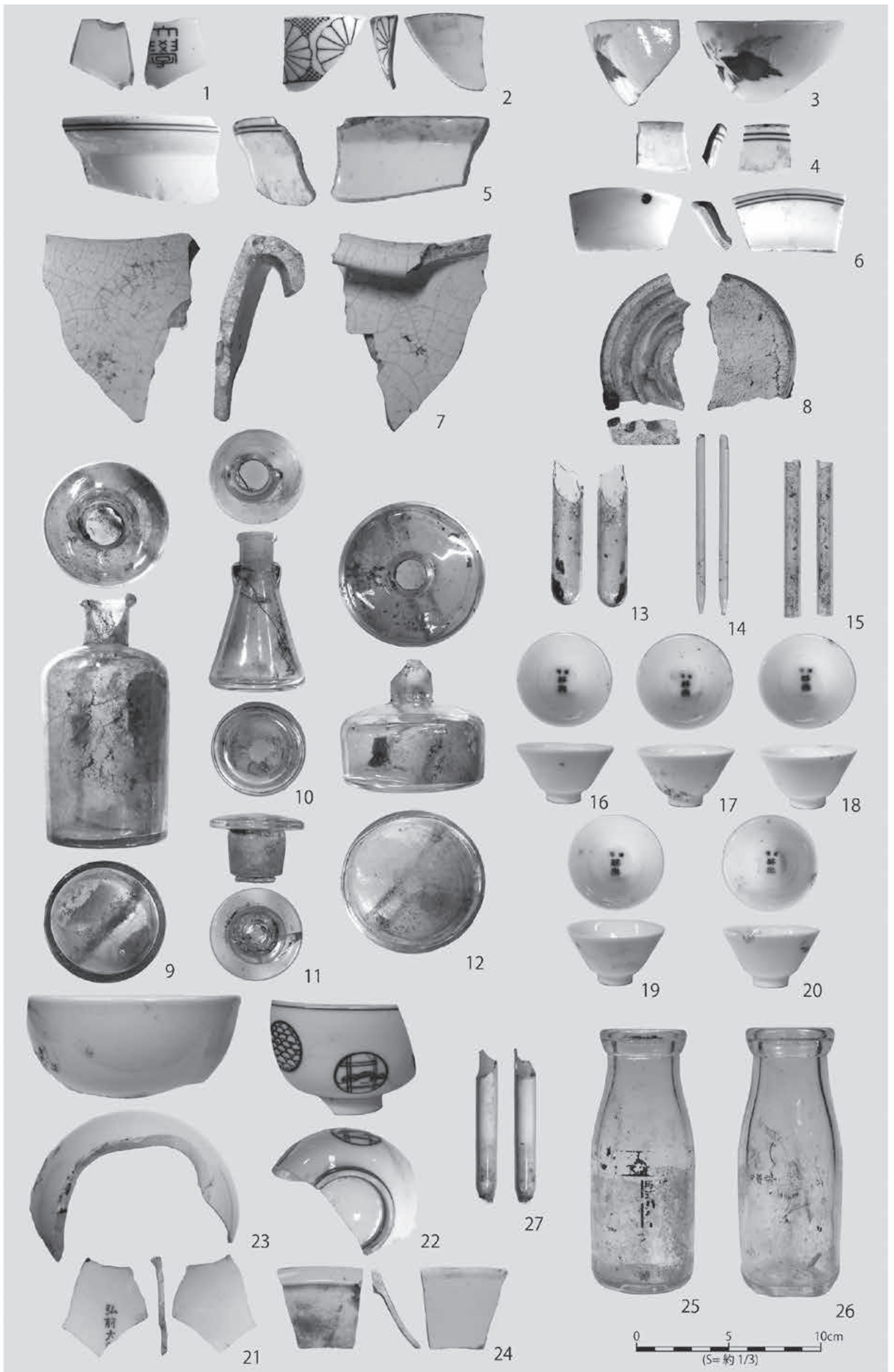


写真1 会館地点、コラボ地点出土品写真

に基づく統制番号が付され、統制陶器となる（萩谷2013）。統制番号が付された緑二重線の食器類は、官公庁、陸海軍、工場、病院、学校など集団給食用に戦時中から戦後直後まで大量生産された。

出土した緑二重線の食器類は、茶碗、丼鉢、皿の3種である。男子寄宿舎の食事風景を写した古写真をみると、昭和3（1928）年（図4-1）に茶碗、昭和16（1941）年頃（図4-2）に上記3種の食器が確認できる。したがって、これら食器類は、学生用に男子寄宿舎食堂で使われていたもので間違いはないだろう。なお、昭和16年12月の太平洋戦争勃発後、米が配給制となり米櫃が姿を消し、丼制になったという（山内編1977、112頁）。確かに、昭和3年と昭和16年頃を比べると、飯櫃は消えて丼鉢が加わったように見える。出土品に丼鉢が含まれる点は、昭和16年以降の廃棄を示すともいえそうである。

出土した緑二重線の食器類は、破片のため全体形が分かりにくく、かつ食器のセット関係が不明であるが、同型品が、旧制弘高と同時期に設立した島根県の旧制松江高等学校自習寮で使われた食器一式にみられる（図4-3）。現在、松江歴史館が所蔵する。来歴、用途も明確であり、設立時の大正11（1922）年3月から昭和28（1953）年の新制島根大学時まで食堂を切り盛りしてきた石原音吉さんが名古屋から貨車で買い入れたという（昭和43（1968）年『朝日新聞』「旧制松高物語⑩」記事より）。これら自習寮の食器は、底面に統制番号が振られたものとそれがないものがあり、買い入れ後から少しずつ補充を繰り返しながら、使い続けられていたとみられる。出土した食器類とほぼ同じ構成であるだけでなく、形や容量もよく似る。このような国民食器が全国の学生寮に普及していたことを示す。同じ献立を多数の学生に公平に提供するには、規格化された食器が効

率的だったほか、破損などの消耗頻度も高かったため、硬質かつ安価な食器が好まれたのだろう。旧制弘高にも、旧制松高と同じように、賄い夫として食堂を長く切り盛りした方（一戸秀市さん）がいた。出土した食器類も北溟寮が完成した大正11（1922）年4月から間もない時期に購入され始め、新制大学発足後も寮が移転する昭和41（1966）年頃までは使い続けられていたとみられる。

「大學」印字の湯呑については、偶然、古物店で見たため、その全体形を知ることができる（図2-1右写真）。これにより湯呑の「大學」の反対側の面には、「弘前大学教育学部」と印字されていたことが分かる。弘前大学教育学部

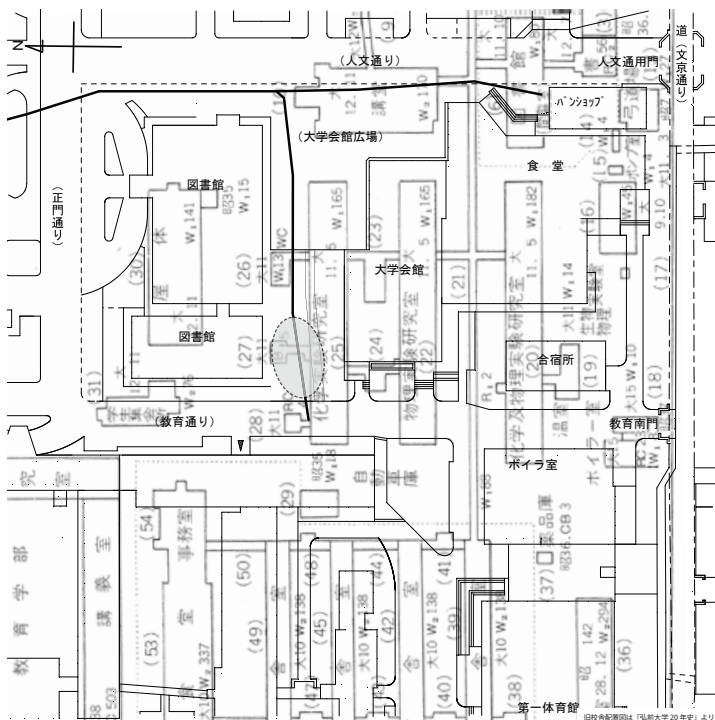


図3 会館地点の位置 (トーン範囲)

は、昭和24（1949）年6月1日に発足した。この時の教育学部校舎は現、弘前公園内にあり、昭和38（1963）年、校舎第1期工事が竣工し、現在の文京町キャンパスへ移転し始める。よって「大學」印字の湯呑は、昭和24年以降、おそらくは教育学部発足を記念して作られたと推定される。

実験器具についてみると、遺構周辺の化学実験研究室棟にはレンガ造りを示す「B」と書かれた薬品保管施設が伴っていた。実際、旧制弘高化学実験教室の古写真を見ると、出土品と同じ薬瓶が写る（図4左下）。昭和40（1965）年に、理学部が分離、現在の理系地区へ移転した。

化学実験研究室棟と男子寄宿舎は昭和41（1966）年に解体された。よって出土した実験器具は旧制弘高から理学部分離前までの化学教室で使用されていたものと判断される。

しかし、見つかった廃棄土坑の場所は、正門から寄宿舎へのメインルートの脇にあたる。こうした場所にゴミの廃棄施設があったとは考え難い。よって、会館地点の廃棄土坑は、昭和41年の解体時に掘られたと推測する。以上より、出土品は下限を昭和40年頃として、移転時に古くなって不要になった昭和20年代以前の不燃物で占められる。金属製品がほとんどない点は、これが分別されたことを示そう。

続いて、コラボ地点の出土品を検討する。出土品には、理化学用品が含まれることから、弘前大学の理系学部設置後の資料と分かる。さらに販促用の盃と牛乳瓶から使用年代が絞れる。まず、盃に印字された「酔樂」は、分かった範囲では福岡県久留米市の蔵元「古賀」の日本酒銘柄である。蔵元「古賀」は、平成10年ごろには廃業しており、正確な配付年代は不明である。こうした銘柄が印字された盃は、蔵元が大量受注し、販売促進用に配付された。同形態の盃は、津軽地域の酒蔵にもみられ、こうした販売戦略は全国的に展開していた。昭和31（1956）年の農学部観桜会の写真が残っている（図4右下）。この観桜会は旧旅団司令部庁舎前で、現コラボ弘大正面玄関付近で開催された。注目されるのはその写真に、同型の盃が写りこんでいる点である。よって同類の盃は、昭和30年代に出回っており、まさに出土地の場所で使われていたことが判明する。この旧旅団司令部庁舎の裏には、職員集会所があった。観桜会などの行事に使った食器類はこうした場所に保管されていたとみられる。

出土した牛乳瓶のうち、25は明治乳業の明治牛乳の瓶である。牛乳瓶を網羅的に研究した論文



図4 古写真にみる出土品

は見られず、インターネット「漂流乳業」のサイトが詳しい^{*1}。これによれば、昭和39～42年頃に流通したもので、欠けていた裏面のラベルには「食卓に明治バター」と記されていた。「㊦ 180cc」のエンボスは、「計量法」（昭和31年）の規定で、瓶のある高さまで液体商品を満たした時、正味量が確保されるように作られた特殊容器を示す。また底面のエンボスには「5-I Y 122」とある。先頭の数字は製造年の西暦一桁、次が製造月、アルファベットは製瓶会社記号、下の数字は金型番号を示す。よって5は昭和40（1965）年、Iは1月、Yは山村硝子（株）と判断される。したがって、25の牛乳瓶の製造年代は、昭和40年1月頃と判断される。もう一つの牛乳瓶（26）の詳細は不明だが、下部側面のエンボスをみると、「8 I:K（菱形囲いにS）74」とある。よって、26の製造年代は、昭和33（1958）年3月と推定する。

以上をまとめると、廃棄土坑の出土品は、昭和30年代を中心に遅くとも昭和40年頃まで使われていたものとみられる。この場所は、昭和41（1966）年完成の理学部（現 理工学部）校舎と、旅団司令部の建物を利用した農学部第1号別館（後に園芸教室）の間にあたる。また近くに職員集会所があった。廃棄土坑は旧理学部校舎南側に隣接し、さらに校舎下に及ぶ可能性が高い。したがって、本土坑は昭和40年度の理学部校舎南側建築前にはあったと推測される。さらに、昭和42年度までには、農学部第二期工事に伴い農学部第1号別館および職員集会所が解体される。昭和41（1966）年の農学部第一期工事で農学部周辺が急速に変貌した時期であり、取り壊し予定の建物では、移転のために不要物品の整理も進められていたと考えられる。このように出土品が、主に昭和30年代の資料で構成される点、校舎の解体・建築年代が昭和41・42年頃である点をふまえると、本土坑は、農学部および職員集会所施設解体に先立ち作られた廃棄場で、年代は昭和40（1965）年を下限とし、それから程ない旧理工学部校舎南側の建築前には、埋められたと推定される。

4. 旧陸軍第八師団関連建物

農生地点と圃場地点では、明治期～戦前までの旧軍関係の資料が出土した。農生地点には旧第八師団司令部庁舎、圃場地点には同師団経理部庁舎及びその附属建物があった。

4-1 農生地点（旧第八師団司令部庁舎跡）の調査結果

農学生命科学部東側道路の農生門から入って30mほど進むと、ロータリーがあり、さらに進むと農学生命科学部校舎中庭に入る。中庭には、東側に標本樹木、西側に芝生が植栽されている。工事の際、中庭を縦断するように長さ70m、幅50cm、深さ70cmほどの配管用の溝が掘削された（図5）。掘削断面から遺物包含層と砂利層を確認した。その際、掘削溝の中から面取りされた石材が掘り出され、これを回収した。図6はその掘削溝壁面の概略図である。観察される層序は9層ある。I層は植栽基盤土、II層は中庭整備時のローム客土である。地表下15cmからはじまるⅢ～Ⅵ層が遺物包含層である。このうちⅣ・Ⅵ層が砂利層である。Ⅳ層は地表下20cm、層厚10cmである。砂利はⅥ層よりも径が小さく、木炭、瓦片が多数含まれる。一方、Ⅵ層は地表下35cm、層厚30cm程である。砂利はⅣ層よりも大きい板状の径5～7cmの礫が充填され、出土品を含まない。Ⅶ層とⅧ層

は腐食土層、IX層は黄色ロームの基盤層である。VIII層は周辺の掘削溝でも見つかり、その範囲は広い。見つかった石材については、立ち合い時にはすでに取り上げられていたため石材の順序は不明だが、工事作業員の聞き取りによるとVI層上で発見された。以上から、IX層を基盤とし、VII層が建造物建築以前の土壌あるいは耕作土層、III～VI層は遺構の一部と判断される。このうちVI層は建物基礎に伴う遺構、III・IV層は、建造物建築後の遺構とみられる。確認範囲は限られるが、IV層は南北方向に長さ4mほど、VI層は東西方向に最低5m続く。ロータリーより東には続かない。

石材は7点回収した(図7)。色調は青色系と灰色系の2種ある。工事作業員によれば、全て幅50cmの掘削溝からまとまって出土したという。直方体の切石と板状で扁平な切石に二分される。1～6は直方体

の切石もしくはその破片である。1・4は上面、2・3・5には上下左右面にモルタルが付着する。モルタルが付着する面を上下に据えると、高さが約30cmに統一される。幅は42～150cm、厚さは28～45cmで不統一である。1上面のモルタルには等間隔に2ヶ所筋状の凹みがある。4の上面は、他の面に比べ小敲き仕上げで平らに整形された後にモルタルで覆う。5は側面に金属チキリ(膝締め)がある。一方7・8は長方形で、厚さ12cmの板状で扁平な石材である。側面にモルタルが付着する。表面は小敲きで仕上げた後さらに研磨される。左右の隅から奥10cmほどの範囲を細かく削る。8は、周辺を踏査したところ、農生地点から40m離れたボイラ室裏で発見した同様の切石である(図7-8)。7と同じ板上扁平な石材で下面と裏面にモルタルが付着する。裏面の

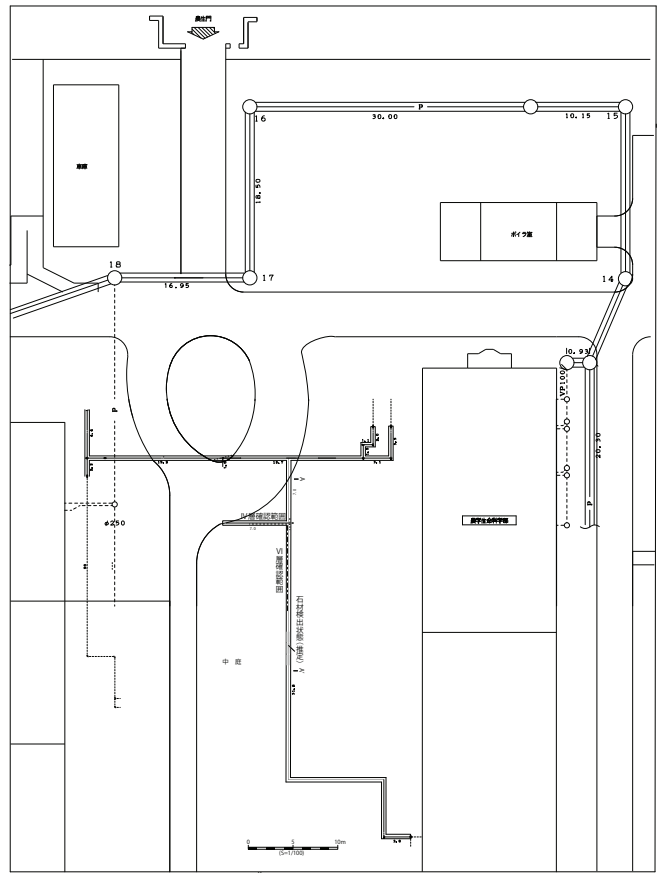


図5 農生地点の位置およびIV層・VI層・石材検出範囲

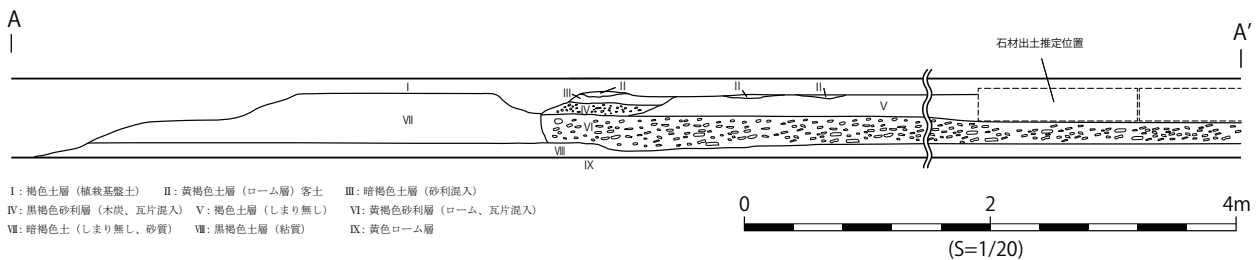


図6 農生地点断面模式図



図7 旧第八師団司令部庁舎跡出土石材実測図

モルタルは縁に沿ってL字形に付着する。

石材のほとんどは溶結凝灰岩で、付近ではサバ石と呼ばれるものとみられる^{※2}。サバ石は大鰐町の鯖石や八幡館などで採石されていた。サバ石のうち硬い方（強溶結）の石材は土台石に使われていた（島口2018）。

石材以外の出土品には陶磁器、瓦、壁材がある（図9-1～8、写真2-1～8）。瓦はⅢ～V層、それ以外は、掘削土から回収した。陶磁器（同1～3）には小皿（同1）、湯呑茶碗（同2）、碇子（同3）がある。碇子はノップ碇子で径3.5cmの小型品である。瓦は小片が多数散布していたため、縁が残り、種類が分かるものを図示した（同4～8）。棧瓦（同4・5）と、のし瓦（同6・7）がある。陶土や釉薬の色調から大きく二分される。ひとつは硬質で、陶土は灰色、光沢のある黒褐色釉である（同4～6）。もう一つは陶土が明るく赤味があり、銀色がかった鉄色釉である（同7）。双方とも釉薬はどぶ漬けで刻印はない。数は前者のほうが圧倒的に多い。同8は壁材の一部とみられる。薄いモルタルの上に漆喰が塗られる。モルタルの中には針金が入る。

4-2 圃場地点（旧第八師団経理部跡）の調査結果

出土品が集中した場所で東・西地点に分ける。東地点は、温室の間であり旧師団経理部庁舎があった場所にあたる（図8）。全て掘削土から回収した。陶磁器、瓦、鉄製品、ガラス製品があり、狭い範囲にもかかわらず点数が比較的多い。瓦片のほか、他の地点にはほとんどない金属製品を含む。東地点では、井鉢（図9-9、写真2-9）、瓦（同10・11）、鋏（同12）、釘（同13）、建築鉄物（同14）を回収した。瓦は硬質で、陶土は灰色、光沢のある黒褐色釉が掛けられ、農生地点と同じである。

西地点は動植物実験管理棟の隣接地で、旧師団経理部庁舎の裏で仮兵舎があった場所にあたる。西地点では井戸筒（図10-1、写真3-1）とその蓋（同2）、飯茶碗（同3）、瓦（同4・5）、不明鉄製品（同6）、コーラ瓶（同7～13）を回収した。井戸筒は、掘削土から破片が

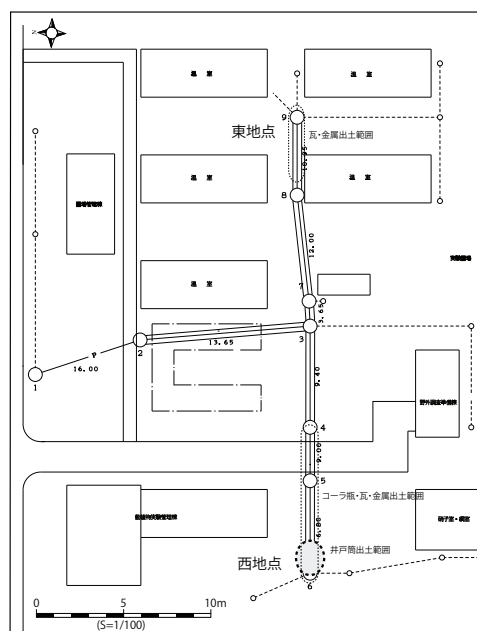


図8 圃場地点の位置

まとまって出土しており、重機で壊されるまでは、ほぼ原形のまま埋没していたとみられる。井戸蓋は、井戸筒と同じ焼き物である。円盤形で表にコンクリートが円形に付着する。このコンクリートの円弧と井戸筒の縁内面の弧が、対応することから、井戸筒の蓋と判断した。蓋には穴があり、ここに手押しポンプが乗せられていたとみられる。井戸筒は常滑系で、復元径85cmである。リングによる装飾が口縁直下に施される。マンガン釉が使われる。大正末期から昭和初期の生産品と推定される^{※3}。なお、このような製品の製作技術は、常滑を主体としつつも全国に拡散したようである。したがって、常滑の職人が招へいされて、青森県内で製作された可能性を残す。瓦は2点とも

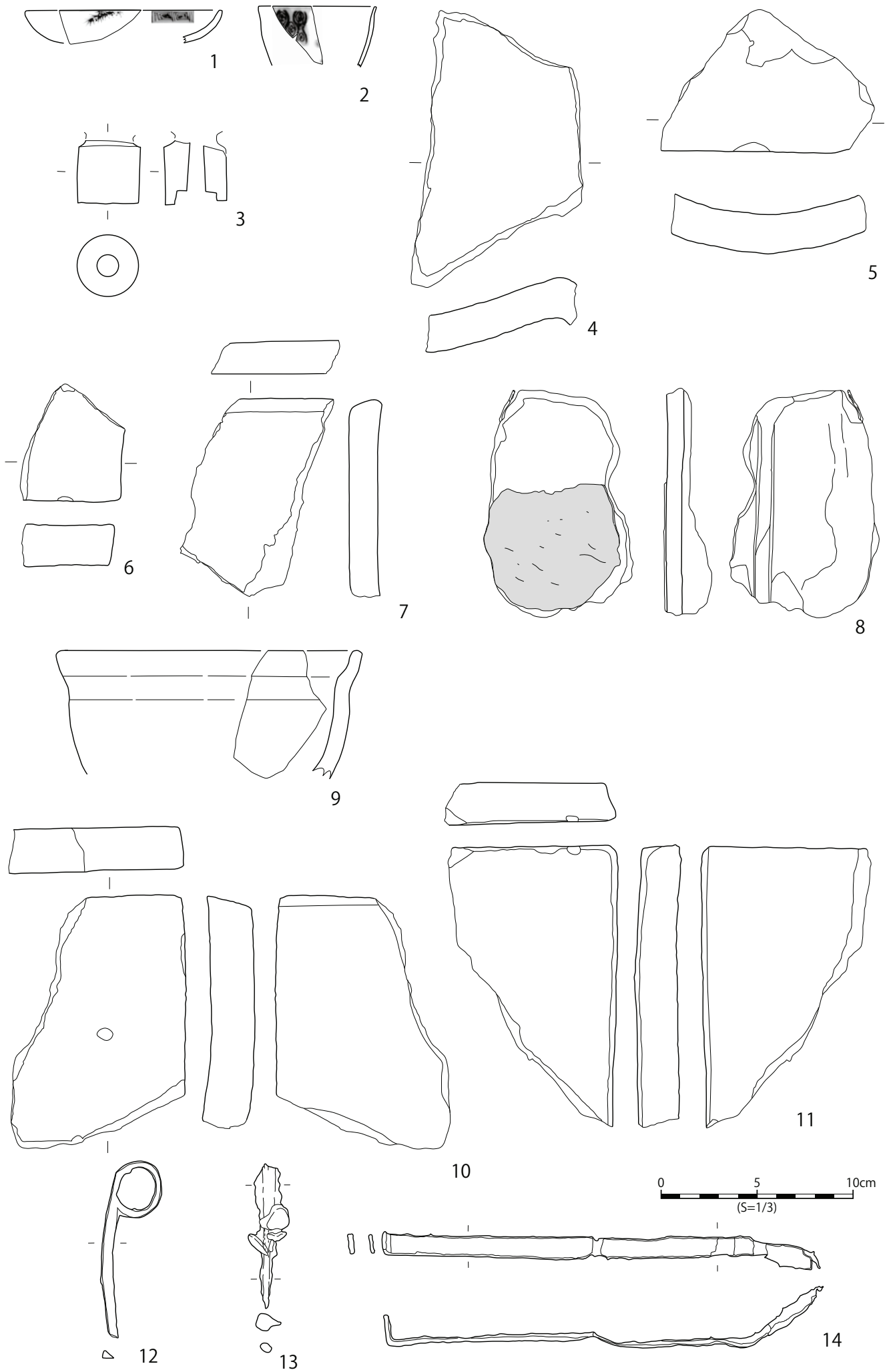


图9 農生地点、圃場西地点出土品実測図

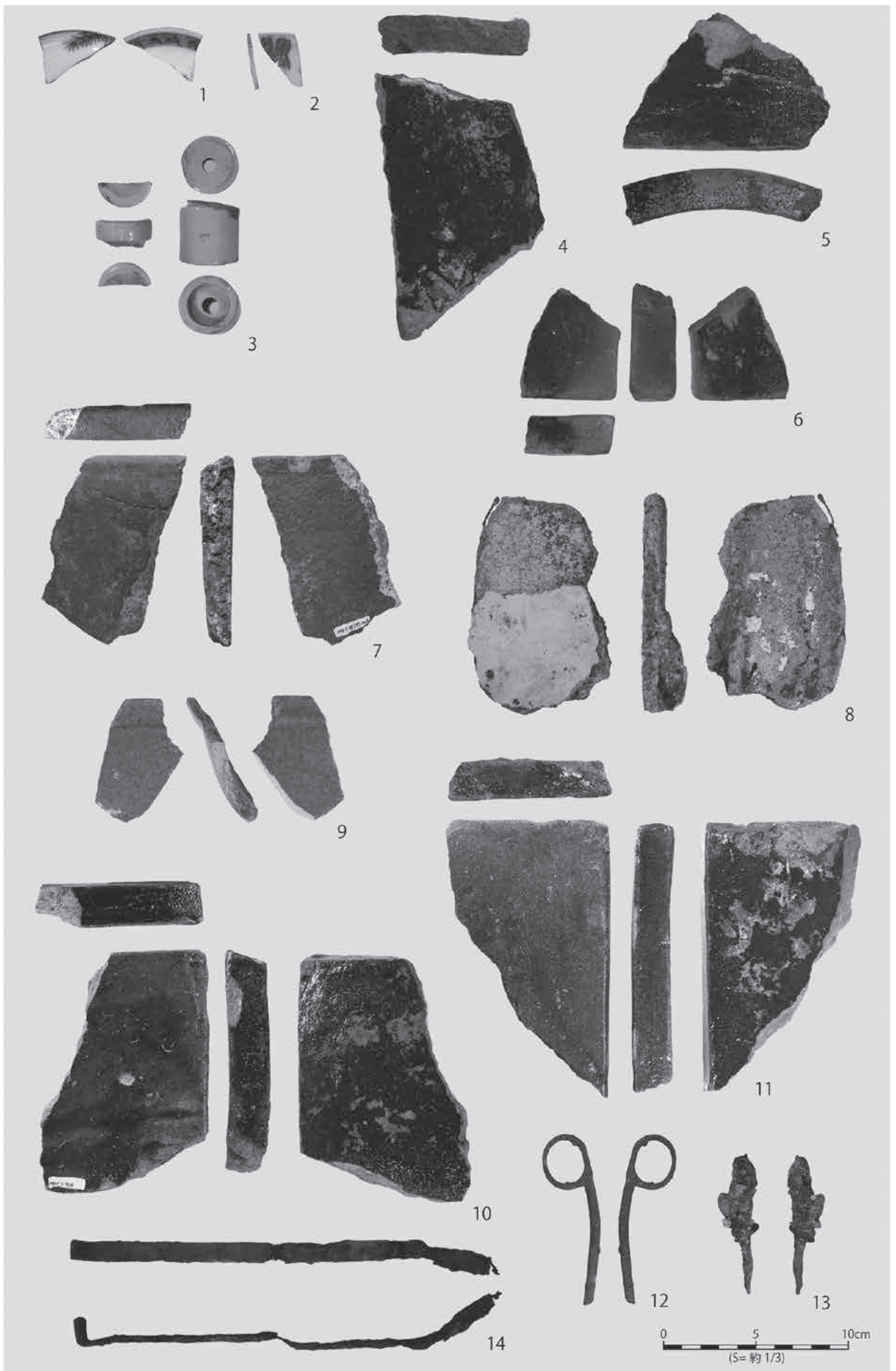


写真2 農生地点、圃場地点西出土品写真

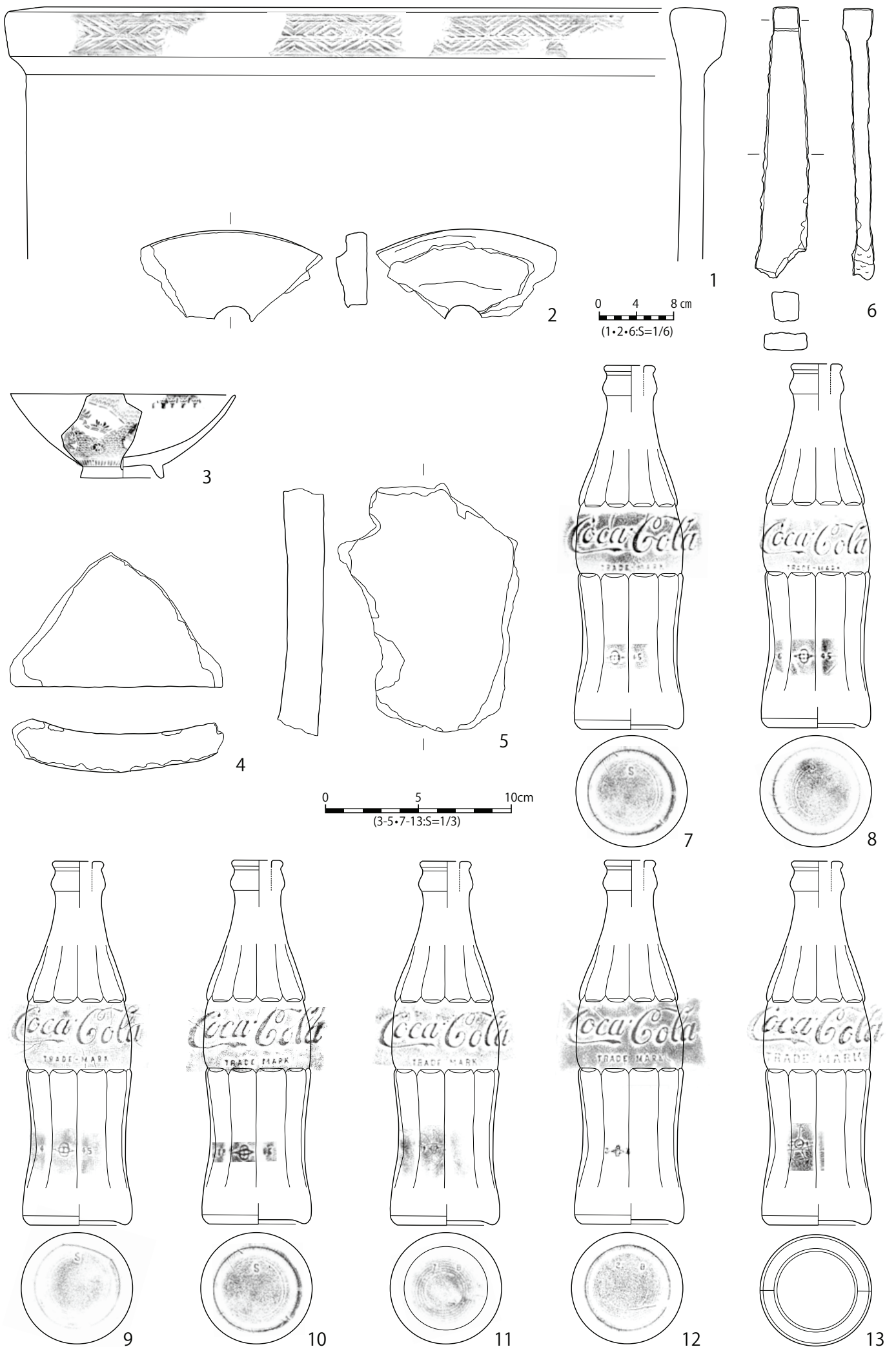


图10 圃場西地点・同東地点出土品実測図

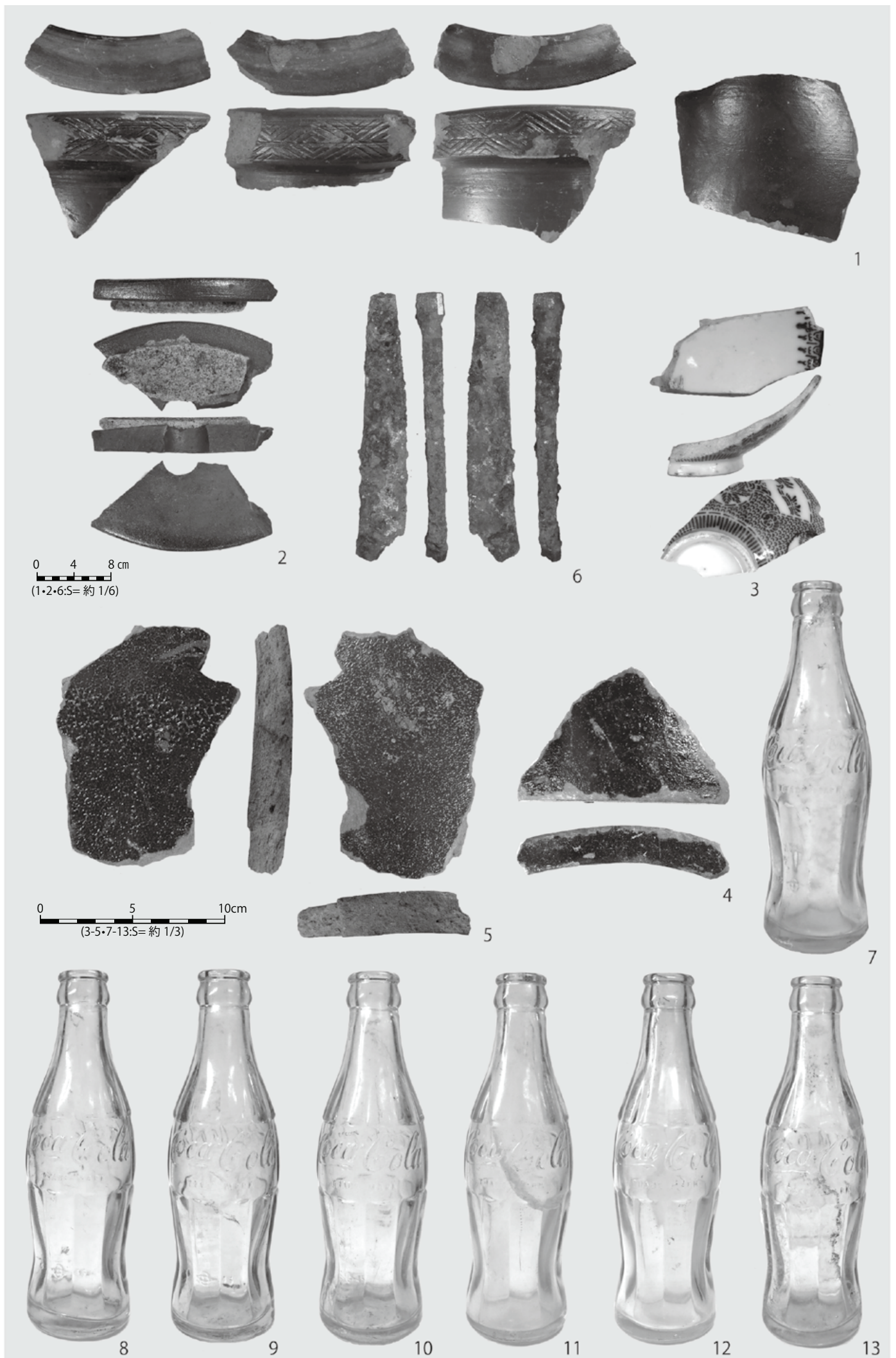


写真3 圃場西地点・同圃場東地点出土品写真

黒褐色釉の棧瓦である。

コーラ瓶（同7～13）は掘削土中に散在していた。容量6オンス（約180ml）瓶である。ガラスは全て透明である。エンボスの違いで3種に分けられる。同7～10は、ロゴの下に小さい「TRADE - MARK」、底面に「S」の浮き文字がある。11・12は小さい「TRADE MARK」で間に「-」がない。また「TRADE MARK」の書体が異なる。底面に「2B」「7B」の浮き文字がある。13は大きい「TRADE MARK」の浮き文字があり、底面には浮き文字がない。これらは、いわゆるA～Cタイプに該当し、ほぼ同じ時期に流通していた（桜井2019）。日本初代のレギュラーサイズである。コカ・コーラは終戦後ただちにアメリカから輸入、やがて全国6か所で製造が始まった。当初は水と炭酸ガス以外の原料および機械類のほとんどは輸入に頼っていた。日本の占領米軍兵士用であった。

5. 旧第八師団関係施設の構造

農生地点、圃場地点で検出された遺構、出土品の多くは、明治31（1898）年から昭和20（1945）年までであった第八師団関係施設に関わる。特に農生地点では師団司令部、圃場地点では師団経理部に関わる資料が出土した。そこで、本章ではこれら施設の構造に注目しながら、古文献などを検討する。

陸軍当局は師団の倍増を計画し、明治29（1896）年3月16日、陸軍管区を改正、六師団を新たに増設し、弘前に第八師団を置くこととなった。明治31（1898）年、弘前に新設された。富田から小栗山に通ずる道路沿いに、師団司令部、師団経理部、旅団司令部、憲兵隊、予備病院（のちに衛戍病院、陸軍病院となり、現弘前総合医療センター）が富田大通りに建設された。先に述べた通り、戦後残っていた多くの旧軍関係施設は、詳細な調査が行われないうまま、消滅していった。そのため少なくとも県内には旧陸軍施設に関わる建築学的な情報は乏しい。市内では明治40（1907）年に完成した旧弘前偕行社の令和2年の保存修理報告が最も詳しく、弘前の第八師団施設の建設経緯についても詳しく触れられている。しかし、当時の平面図や仕様書など、出土品の来歴を知るうえで重要な建築物に関する詳細な記録は見つかっていない。ただし、旧師団関係の建造物は戦後も大学校舎として利用されていたため、その間に撮影、記録された資料が残る。

5-1 師団関係施設の戦後

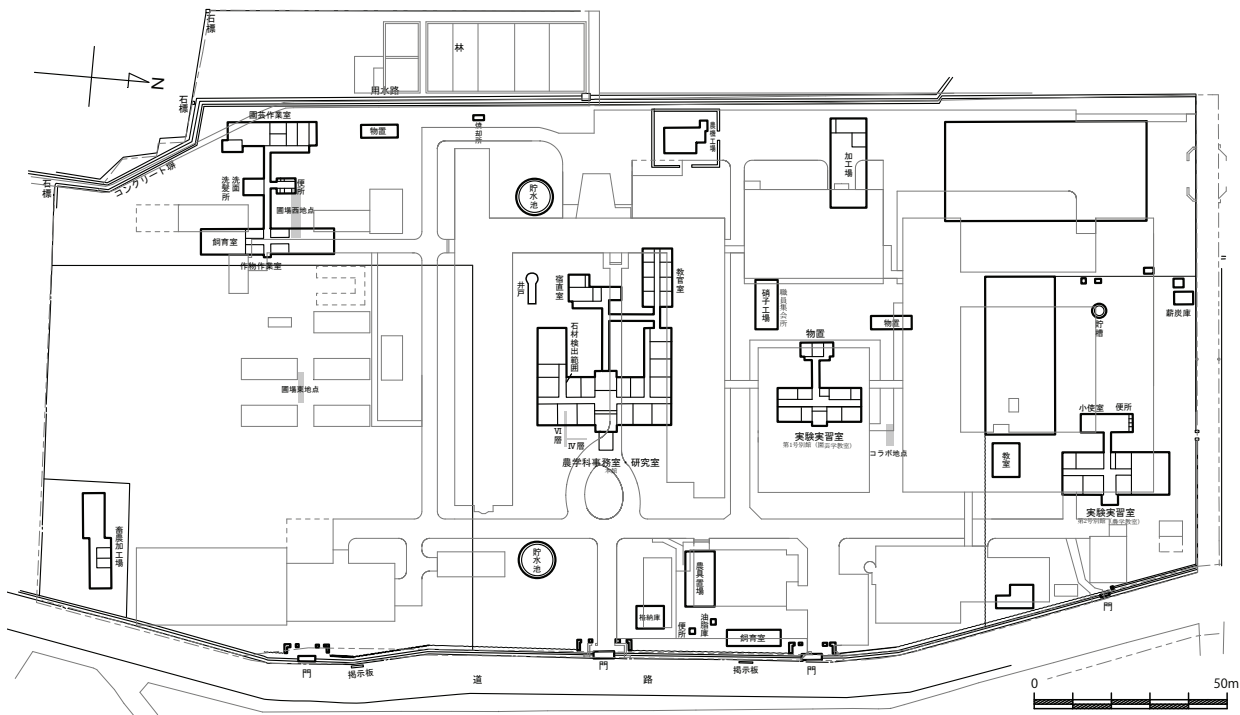
まず、戦後の理系地区の変遷について述べる。現在、農学生命科学部と理工学研究科がある場所には、南から、師団経理部（設立当初は監督部）、師団司令部、旅団司令部、憲兵隊の建物が同じ向きでほぼ横一列に並び、その周囲に関連施設があった（図11）。昭和20（1945）年8月15日の戦後、陸軍の解散に伴い、陸軍省から大蔵省の所管となった。同年9月26日には弘前市に進駐軍が入る。『連合軍の本土進駐並びに軍政関係一件 第2巻』10月8日分^{*4}によれば、元師団司令部に70名の進駐軍が駐留した。

弘前市内では、復員兵や引揚者で弘前の人口が激増したほか、昭和22年の教育基本法と学校教

育法の公布により新学制が確立し、22年に小・中学校、23年には新制高校、24年には新制大学が発足することが決定し、これらの対応に追われていた。そのために、大蔵省が管理していた軍事施設は、昭和25年ごろまでに解体、払い下げが進められた。弘前市では、師団、連隊の広大な土地は住宅地、兵舎は市営住宅や校舎に転用された。旧師団司令部の建物も終戦直後には一般市民の住宅としても使われていた。昭和21（1946）年9月、旧制弘高では新入生を迎えるにあたり、下宿不足で北溟寮だけでは収容できず、旧師団司令部建物2棟を譲り受けて「敬信寮」が設置された（山内編1977、142頁）。こうした事情からも師団跡地が後に弘前大学校地となる素地ができていたとみられる。なお、昭和24年まで旧師団経理部庁舎を弘前税務署、旧師団司令部庁舎を青森財務部弘前出張所が使用していた。昭和24（1949）年に新制弘前大学が設置された。新制弘前大学は、旧制の医大、青師、青年師、弘高の四校を合併した総合大学であった。リンゴ生産の活況で沸く青森県では農学部を設置が渴望されていたが、足掛かりとなる機関や施設がなく、旧制弘高以外は、空襲で校舎焼失、弘前市への移転のため校地に余裕はなかった。そのため、将来的な農学部設置を考慮して昭和26（1951）年、文理学部理学科の中に農学専攻科（農学教室）が増設された。教授陣、施設の不備から学部設置は見送られたものの、大蔵省が管理していた土地と師団施設（43,919㎡）は、弘前大学へ移管、農学部昇格への備えもあり文理学部農学科設備へと転用された。その後も、設置運動が続けられ、体制や設備を強化、昭和30（1955）年、その念願が叶い農学部が設置される。

次に戦後引き継がれた師団関係の建物変遷について述べる。図11上段は、現施設配置に昭和24（1949）年の文京地区校舎等配置図を合わせた。図11下段は、昭和23（1948）年の米軍撮影の空中写真である。昭和25（1950）年『弘前大学要覧』の設備名称を参考にすると、旧軍施設のほとんどが引き継がれていたことが分かる。唯一大きく変わっているのは、税務署があった旧師団経理部庁舎である。弘前大学移転前には、裏の1棟は解体され、庁舎は税務署当直人が酒の上、火災を起こし全焼したとされる。昭和23年の空中写真には建物が写っているので、空中写真撮影から間もなくして被災したのだろう。その後、税務署は旧師団司令部庁舎に移転し、青森財務部弘前出張所と同居する。戦後処理に追われるなかで狭隘な施設は、業務に支障をきたすため、両機関は早々に移転する。旧師団経理部の範囲も校地に含まれることになったのは、この火災をきっかけに税務署が移転したことも遠因にあらう。焼失した師団経理部跡地には、火災を免れた奥の旧仮兵舎を利用して農学科教室実験室棟が整備された。税務署があった名残として、憲兵隊本部庁舎裏に税務署官舎が、昭和27年頃まで残っていた。農学科移転直前の昭和25（1950）年時点で、師団司令部庁舎を青森財務部弘前出張所と弘前税務署、旅団司令部庁舎を文理学部教官仮宿舎、憲兵隊本部庁舎は弘前厚生専門学校の寄宿舍となっていた。

新制弘前大学設置後、昭和24（1949）年に入学した文理学部農学専門課程に所属する第1回生のために設備拡充が検討される。同年4月には敷地選定が始まり、当時大蔵省管轄の現校地に敷地が決定した。他機関の使用施設が明け渡され、1回生が専門課程に所属する前の昭和25（1950）年11月に移転が完了する。旧師団司令部庁舎は農学科事務室・教官室・小使室、旧旅団司令部庁



昭和 24 (1949) 年施設配置と1階間取り (太線) および現施設配置 (細線) (灰色トーンは各調査地点)



昭和 23 (1948) 年米軍撮影の空中写真 (USA-R1466-34) を加工

図 11 昭和20年代の理系地区校舎配置

舎と旧憲兵隊本部庁舎は研究室や実験室となる。そのほか、馬場は運動場、馬房は農産加工室、拘置所は農機工場、衛兵所は巡視室、焼け残った師団経理部裏側の仮兵舎は、その構造的な理由から作物・園芸作業室、便所として利用される。『弘大農学部同窓会会報』第1号には「旧軍隊高級将校が執務、会議に使われた部屋が少しばかりの手直しで教官室、講義室、実験室に早変わりした。」(弘前大学農学部同窓会1983、2頁)とあり、昭和30年の農学部設置後、体制が目まぐるしく変わり、建物や部屋の名称変更、新たな設備の追加があったものの、庁舎自体は、改装しながらも維持されてきた。

校地が大きく変貌するのは、整備拡充計画が進む昭和40(1965)年代前半である。まず昭和40年には、税務署宿舎があった場所に理学部南側校舎が建築される。昭和41年に農学部第一期工事で農学部南側校舎、昭和42年に理学部北側校舎が完成する。校舎が完成し、分散していた部屋が集約されると、旧校舎はその役目を終え、農学部第二期工事に伴い昭和41年から司令部庁舎、拘置所、旅団司令部庁舎と相次いで解体された。幸い、司令部庁舎、旅団司令部庁舎は、工事期間でも教育・研究が継続できるように、これら建物を先に解体せずに残したまま、建物を迂回するように新校舎が建てられた(創立30周年記念誌編集委員会編1985)。このおかげで結果的に建物跡地の一部が削平されずに残り、今回の遺構・遺物の検出に至ったのである。

5-2 師団司令部庁舎と師団経理部庁舎

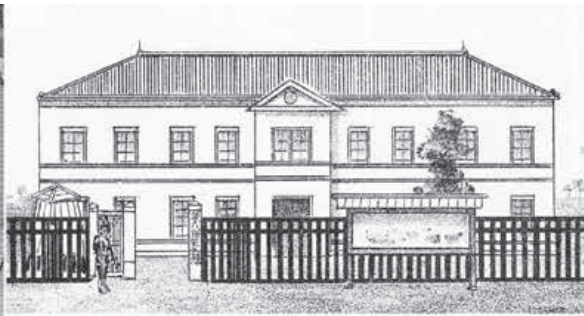
師団司令部庁舎は、陸軍が弘前に設置されたことを示す象徴的建物として、その外観の写真が図録や絵葉書に多く残る。しかし、建物の内部構造や建築材については、戦後のわずかな資料のみである。昭和42年の解体時、大学は、増える学生に対する設備拡充が急務で、旧校舎について記録されることが無かった点は惜まれる。ただし、解体に際し、市民からの保存運動はあり、これに対し市が対応しようとしたという記事がある。そのためか、什器や建築材の一部が学外に残っている。例えば、旧弘前市立図書館に「師団司令部」印がある椅子がある。特に解体時と同じ時期に建設されていた自衛隊弘前駐屯地防衛館には、階段・シャンデリアといった部材一部、壁紙、棟札などが保管、展示されている。全て個人からの寄贈品となっている。おそらく、まだ軍隊に関わっていた人が多くいた時代において、旧軍の象徴的建物の解体を惜しんで、その一部を回収した方々がいたようである。

古写真、絵葉書、図絵に現れる旧師団司令部・経理部庁舎を年代順に図12に示した。まず、この2つの建物の外観について述べる。師団司令部庁舎は391坪、木造2階建、平面形をコの字型にする左右対称の構成である。正面中央は三角形の切妻壁で表現され、2階には切妻の上下窓枠飾三連窓を付ける。2階窓は上げ下げ窓で、屋根は寄棟の瓦葺であった。寄棟屋根の頂部にはフィニアルが据え付けられていた。屋根には突き出した半円の小屋根付き窓(ドーマーウィンドウ)があった。石積布基礎で、外壁は土壁漆喰塗である。

農学部時代の写真には、正面玄関に車寄せが着くが、戦前には追加されていた可能性がある。また、昭和27(1952)年の写真(図12-6)には、小屋根付き窓が写っていないことから、これ以前



1 明治35(1902)年
弘前中央堂 近松徳太郎発行・近松雄吉画 第八師団諸營全図部分



2 明治34(1901)年 太田節次発行・白崎五郎七画
第八師団兵營之全影の第八師団監督部(経理部)



3 明治34(1901)年
太田節次発行・白崎五郎七画 第八師団兵營之全影の第八師団司令部



4 明治40(1907)年頃差出 絵葉書写真



5 大正4(1915)年 絵葉書写真



6 昭和27(1952)年頃 農学科時代写真



7 昭和34(1959)年頃 農学部時代写真



8 昭和37(1962)年 農学部時代写真



9 昭和42(1967)年解体直前
左側に完成した新校舎が写っており、この段階ではまだ解体されていない。



10 昭和41(1966)年 正面玄関
ドラマ撮影のため司令部の看板が掲げられている。

1:弘前市立博物館蔵、2-5:筆者蔵、6-7-9-10:弘前大学附属図書館蔵、8:創立30周年記念誌編集委員会・編1985

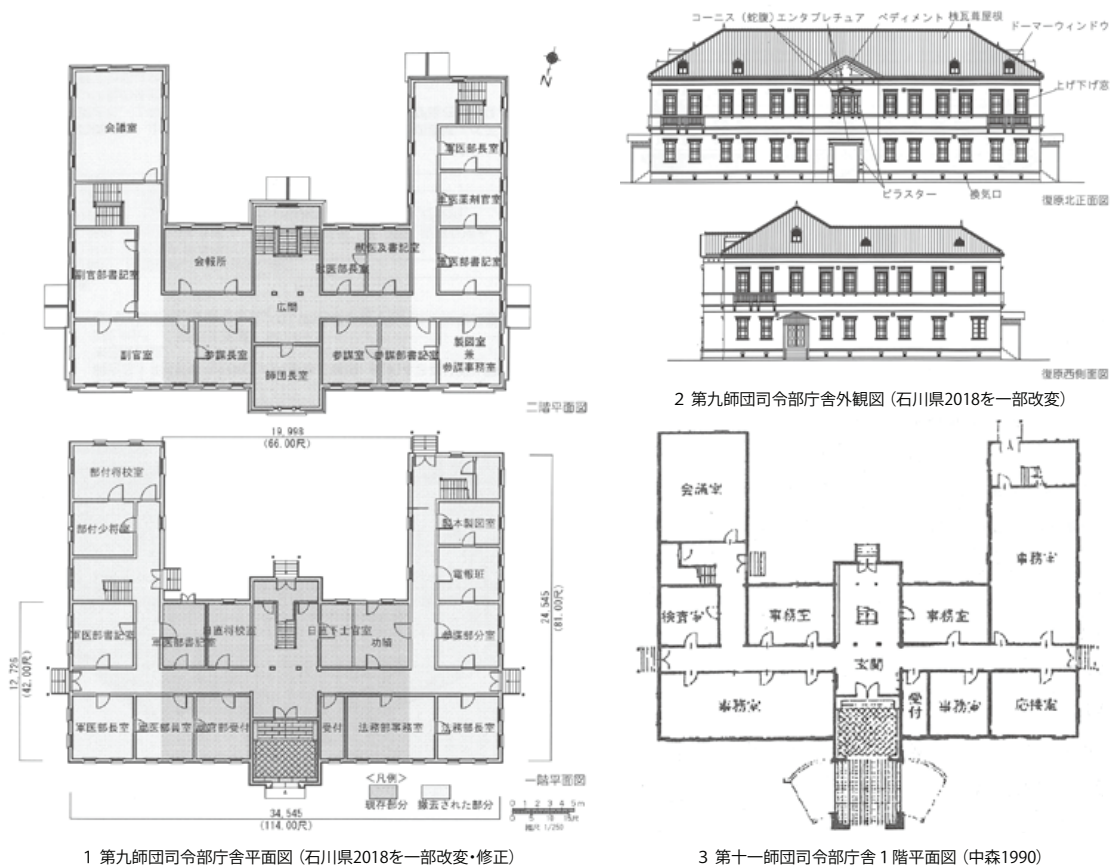
図12 師団経理部・司令部庁舎の変遷

にはフィニアルとともに撤去されたとみられる。昭和30年頃に屋根上に気象観測設備が付けられ、昭和35年頃に瓦屋根から緑色の銅板屋根に替えられた。

庁舎正面右側の棟の奥には渡り廊下でつながれた平屋建の建物が付属していた。この建物は師団法務部（俗称 軍事裁判所）で後に教官室に改装される。農学部時代には、庁舎中央奥に渡り廊下でつながれた宿直室があり、その脇に井戸があった。

師団経理部庁舎は、司令部など象徴的な建築物で無かったため写真などの情報は、かなり少ない。さらに校地になる前に焼失したため、戦後の資料や人々の記憶もほとんどなく、焼け残った庁舎裏側にあった旧仮兵舎の写真のみが残る。辛うじて米軍撮影の空中写真から経理部庁舎の建物は長方形であったことが分かる。明治34（1901）年発行の全影図（図12-2）によれば、木造2階建であった。左右対称の構成で、正面中央は三角形の切妻壁で表現される。窓は上げ下げ窓で屋根は寄棟の瓦葺であった。構造は先述の司令部庁舎と同じであるが、窓枠や玄関の付柱（ピラスター）に装飾がない点、屋根から突き出した切妻の小屋根付き窓がない点など、司令部庁舎より簡素だった。庁舎裏には渡り廊下で木造平屋建の建物につながる。経理部糧飼部の建物とみられる。そしてその奥には少なくとも3棟の建物が渡り廊下で翼状につながっていた。これらのうち、2棟が仮兵舎で、その間に洗濯場や便所があった。これら仮兵舎等は明治31（1898）年当初にはなく、大正12（1923）年に増築された。仮兵舎の構造は、木造平屋建で切妻屋根、外壁は下見板張である。屋根は現存する山田野演習場兵舎に似る。図11上段をみると、今回検出された圃場西地点（図11灰色トーン）は、便所付近に当たり、畜舎になった現在も井戸の痕跡が確認できる。こうした水回りを要する施設に近接することから、出土した井戸筒が、もともとは井戸に据え付けられていた蓋然性を示す。また、上記進駐軍が元師団司令部に駐留したという古文献の記述と、出土したコーラ瓶が進駐軍用に供給されていた点を考えると、コーラが進駐軍によって初めて当地にもたらされたことを示唆する。そして、進駐軍が旧師団経理部裏の仮兵舎に滞在し、師団中枢部を監視しながら武装解除に向けた行動を実施していたことがうかがえる。

次に、状況が多少分かった師団庁舎内部について述べる。農学部設置当初庁舎内部には40室あった。庁舎の大規模な内部改修記録はないので、戦前からほぼ踏襲されていたとみられる。弘前大学附属図書館で発見した昭和24（1949）年作成の青焼きの構内平面図には、1階のみであるが部屋割が描かれている^{*5}。図11上段の太線は、そこから図に起こしたものである。図13は、第八師団と同じ日清戦争後に増設された六個師団で、同時期に建設された第九師団司令部庁舎（金沢）の平面図・外観図と第十一師団司令部庁舎（善通寺）の平面図である。これを見ると部屋や階段の配置、大きさが共通する。そのほか、「師団司令部建物二階東側中央に師団長室（約60㎡）がありました。」（創立30周年記念誌編集委員会編1985、20頁）、「玄関を入ると、立派な檜造りの階段があった。二階にある師団長室、副官室の前を通り右に曲がると奥に参謀部別室があった。」（我満1989、41頁）という当時のことを知る方の記述から推測される室名も、第九師団司令部庁舎の室名にほぼ対応する。したがって、部屋割りや広さ、構造だけでなく第八師団司令部庁舎各室の室名



1 第九師団司令部庁舎平面図 (石川県2018を一部改変・修正)

2 第九師団司令部庁舎外観図 (石川県2018を一部改変)

3 第十一師団司令部庁舎1階平面図 (中森1990)

図13 第九・十一師団司令部庁舎

や用途も、第九師団司令部庁舎とほぼ同じだったと考えられる。このような、師団司令部庁舎の共通性は、中森（1990）が指摘する外観に加え、内部の間取りにもうかがえる。その背景に日清戦後の軍備拡充による兵営施設の早急なる整備という陸軍の事情から、同一の設計図面等を用いて、これに対応したためと考えられている（中森1990・1995）。ただし、図13-2の第九師団・第十一師団司令部庁舎の外観と比べると、第八師団司令部庁舎のほうが2階左右両側の窓枠下の装飾が無いなど細かな違いがみえる。第十一師団司令部の場合、初代師団長 乃木希典により師団長室の位置や部屋の内装が変えられており、第八師団においても師団長の意向などにより細部には変更が加えられていた可能性がある。

6. 出土品をふまえた師団司令部庁舎の基礎と瓦の仕様

はじめに、施工者を検討する。当時の建築を知る手掛かりとして、尖頭形の棟札が残る（図14）。設計は臨時陸軍建築部技手 横山幸左衛門と本間惣太郎である。臨時陸軍建築部は明治29（1896）年、増設する六個師団の兵営工事増大に対処するために一時的に設置されたもので、120名余りの技術者集団で構成されていた。技術者の大多数を占めた技手は、各地方の新設師団に配属されて建設工事の監督に従事した（中森1990）。



表 裏 表 裏

図14 第八師団司令部庁舎棟札 (陸上自衛隊弘前駐屯地防衛館蔵)

工事請負人は佐々木喜太郎（1836-1890）で、「布屋三之助」として北津軽郡五所川原村の素封家で知られる。地主、酒造業、土木工事請負人で貴族院議員選挙人を務めた。建築時の明治31（1898）年「全国多額納税者互助名鑑」では、番付の一位、北津軽郡で最も大きい地主であった（渋谷編1984）。小国・今泉の鉄山経営も行い、明治27（1894）年に奥羽本線の大釈迦トンネルの工事を請け負う。こうした公共物工事の経験から、工事請負人になったとみられる。棟札には青森県で洋風建築を多く手がけた大工棟梁 堀江佐吉（1845-1907）をはじめ、津軽の近代建築を担った関係者が名を連ねる。

本章では、工事関係者のうち出土した石材と瓦を請け負った石工と瓦製造者に注目する。棟札には、「鉄物類世話方農具合資會計員石工世話方」として工藤亀蔵、山内三次郎、板橋久之進、板橋勘之助、山内徳太郎の5名が連なる。これらは鉄物類世話方、農具合資會計員、石工世話方に分けられる。工藤亀蔵は旧第五十九銀行本店本館棟札（明治37年）に諸鉄物方として名があることか

ら、本司令部庁舎でも鉄物類世話方に該当しよう。

山内三次郎は、旧青森県尋常中学校本館棟札（明治27年）の棟札に石工として名がある。山内は弘前の石工で弘前市弘前八幡宮（明治32年）や同市 羽黒神社（明治20年）、平川市三社神社（明治20年）の狛犬を手掛けている。また旧制弘前高等学校棟札（大正12年）には山内亀吉の名がある。安政元年創業で、山内三次郎、山内徳太郎、山内亀吉の3名は、同族で現在も石材店として続く。よって工藤亀蔵ら5名のうち、工藤は鉄物類世話方、山内は石工世話方で、残る板橋久之進と板橋勘之助は、他の棟札にない農具合資會計員と推測する。

山内三次郎と堀江佐吉は同じ世代でもあり、西洋建築に関しても理解を示したのだろう。石材は岩木山麓の安山岩を主に地元石材を広く扱っていた。石材は冬季に橇に付けて運ばれたが、師団関係の建築には限られた工期で大量の石材を供給しなくてはならなかった。サバ石が使用されたのは、明治28(1895)年に、奥羽本線弘前駅-碓ヶ関駅間が開業したこととも関連あるかもしれない。

瓦に関しては、瓦製造及葺方として村元宇兵衛と辻本卯之助の名がある。村元宇兵衛は旧第五十九銀行本店本館棟札にも名がある。辻本卯之助については不明である。大正元年時点で県内には石切職206戸、煉瓦職15戸、瓦職5戸があった（青森県内務部編1912）。昭和2（1927）年『日本瓦業総覧』（井上1927）には製瓦業者として東津軽郡野内村の増子嘉市と、三戸郡八戸町の高橋瓦工場の2戸のみになっていた。同書青森県瓦販売者として弘前市の田中熊蔵と山崎瓦店の名がある。このように瓦業については明治後期には軍関係で一時的な隆盛を見るものの、一般家屋には普及せず、その後、急速に衰退していった。

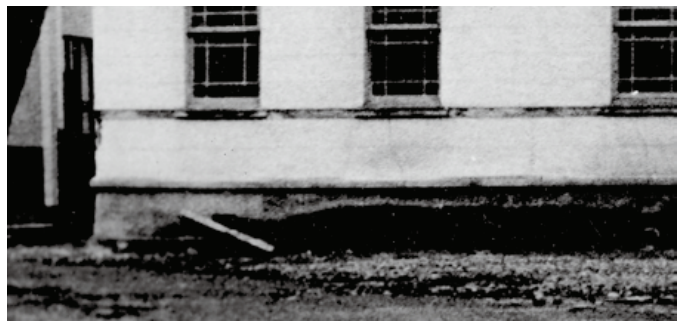
その他の職工をみると、木挽職、泥工（左官）職、煉瓦職、鉄板職、屋根葺職、ペンキ塗職など多くが堀江建築に共通するか、あるいは苗字から同族と推測される。このように、第八師団司令部庁舎は設計は軍部主導であっても、建築の体制は棟梁 堀江佐吉や副棟梁 川元重次郎の下で動いていた地元の職工が採用されていたことがうかがえる。

2つ目に、出土した石積布基礎の仕様を検討する。本建築から6年後に堀江佐吉が手掛けた旧第五十九銀行本店の根切は、「幅四尺（約1.2m）深四尺五寸（約1.4m）ニ掘割栗石小砂利入レ蛸胴突ニテ搗堅メ…厚壹尺貳寸（約36cm）ニ打堅メ」（『株式会社第五十九銀行建築設計書』文化財建造物保存技術協会編1985（ ）は筆者註）とある。本調査のⅥ層が出土品を含まない砂利で構成され、その範囲が建物下に収まる点、層厚が約30cmで当時の工法とほぼ同じ点から、Ⅵ層が基礎に設置された割栗石と判断される。また布基礎について同書には「側廻り及中仕切階段石共八幡館産硬石ヲ使用見得仕上小敲ニシテモルタルニテ据付」とある。八幡館産硬石はサバ石ともいう。石材やモルタルで据え付けるといった工法上の共通点から、Ⅵ層上で見つかった石材のうち直方体の切石は石積布基礎の地覆石であったと推定される（図15-1）。さらに解体時の基礎の写真が残る（図15-2）。これをみると、側廻りだけでなく、各部屋の壁の中仕切まで石積布基礎を入れている。石材検出位置と建物の部屋割を合わせると、ほぼ建物正面に向かって左奥の仕切壁と対応する（図15-2の丸囲い範囲）。よって石材の状態だけでなく検出位置からも石材が建物基礎であったと判断

できる。特に石材表面が粗いのは、基礎の場所が建物の内側に当たり、外観からは見えないためであろう。一方、直方体の切石とは別の板状扁平な石材はこの地覆石と葛石の間に置かれた羽目石と推定される（図15-1）。羽目石の間に方形の換気口が付けられていた。

そのほか、断面には割栗石と判断されるⅥ層とは別に、砂利層であるⅣ層があった。この層はⅥ層よりも礫径が小さく瓦片や陶磁器片を含むが、小片で磨耗する。また建物内側よりもロータリー側に分布する。古写真（図15-1）をみると建物の周りに砂利が敷かれているのを見て取れる。これは、玄関前のぬかるみ対策のほか、雨落石の役割があった。Ⅳ層はこの雨落石の一部と推定される。長く地表面に露出していたため破損した瓦などが混入したと考えられる。

3つ目に屋根瓦について検討する。明治期における弘前での大規模な瓦葺建物は、これら陸軍関係施設が初めてであったとみられる。古写真から屋根は棧瓦葺で、建築当初31段葺、棟積は割戻斗4段に丸棧付の雁振瓦を乗せ、頂部にフィナル、隅には鬼瓦が付けられていた。雪止めが付く。旧弘前偕行社では、黒褐色瓦と赤褐色瓦の2種が認められ、黒褐色瓦が当初、赤褐色瓦が後補とされる（文化財建造物保存技術協会編2019）。赤褐色瓦には刻印があり、その刻印から安田瓦と判断される。旧第五十九銀行本店本館の瓦は昭和60（1985）年の保存修理時には安田瓦を使用した。展示説明には、「当初の平瓦は、鱒ヶ沢の窯場で焼いたものを使用したと伝えられ…」とある。鱒ヶ沢町には大正15年に屋根葺業が5戸あったが（鱒ヶ沢町史編さん委員会1984）、茅葺職人も含むとみられ、詳細は不明である。建築時とされる瓦をみると黒褐色釉で尻に釉薬を付けない点から、旧第五十九銀行本店本館の当初瓦も旧弘前偕行社の当初瓦に類似する。安田瓦^{*6}は新潟県阿賀野市内で生産される還元瓦で、褐鉄鉍や赤鉄鉍の生釉を施釉し1,200℃で還元をかけて焼成される。そのため鉄色瓦とも称される。江戸時代後期に越前の瓦職人が興した笹岡瓦から分岐した瓦である。その特徴は、高温で焼き上げるため歪が大きい、硬く、寒冷地向きの瓦であった。日清戦争後の弘前師団兵営および北海道旭川師団兵営の瓦製造を請け負ったことで興隆した。この時は、漆山文吉と石黒林三郎と協議して瓦を焼いた（漆山1979）。明治の中頃までは小型平窯、通称



1 昭和42(1967)年解体直前時の石積布基礎（図12-9拡大）



2 昭和42(1967)年解体時基礎（弘前大学農学部同窓会1984）
○印は石材出土範囲に対応する基礎

図15 古写真から見る師団司令部庁舎基礎仕様

「坊主窯」であったが、明治17年の登窯の導入を契機に量産化を始める。窯元は明治30年頃に15軒、明治末までに25軒ほどまで増えた。当地産の瓦も運んだが、現地でも新たに工場を建てて焼いた。明治30（1897）年、石黒善太郎が弘前で瓦製造を始めたという（前田1972）。ただし、石黒と師団建築を結びつける資料は、弘前側でない一方、当時の瓦業者の名前や『北蒲原郡瓦製造業者名簿』（大正15年）を見ても、安田の瓦業者と村元、辻本を結びつける資料もない。したがって今のところ、黒褐色瓦の製造場所は不明である。旧師団司令部および経理部から出土した主な瓦は、旧第五十九銀行本店本館と旧弘前偕行社の当初瓦に相当する黒褐色瓦である。出土した黒褐色瓦について、安田瓦協同組合に持参し確認していただいた。当時の安田瓦は、陶土が赤っぽく白味がかかる。また釉薬が濃い鉄色で、全体に釉薬をどぶ漬けし光沢が少なく、刻印を押す。それに対し黒褐色瓦の方は、陶土が灰色で、釉薬が黒褐色、かつ釉薬が厚く光沢をもつものもある、刻印がない、といった点で、安田瓦とは異なるという。黒褐色釉薬の瓦は、陶土と釉薬は異なるものの、当地の気候に耐えるような硬質な瓦である。こうした耐気候性の瓦を大量生産するには、高温化の技術を導入する工場を要したとみられる。

一方で、黒褐色釉薬の瓦とは別の農生地点出土の鉄色釉の瓦（図9-7）は、上記安田瓦の特徴を有す。なお、両者とも赤瓦で知られる石州瓦とも特徴が異なる。この点は、近代以降の石州瓦の分布を調べた阿部（2018）によれば、石見焼の分布に比して北陸～東北日本海沿岸では越前系が多く、競争を避けるために主要な港町と、越前系が少なかった北海道で石州瓦が隆盛となったものとされる。安田瓦は技術的な系譜から越前瓦に属しこれを裏付ける。よって、農生地点出土の鉄色釉の瓦を安田産の瓦と断定することは難しいものの、その系統にある窯元で作られた瓦と考えられる。

以上のことをふまえると、師団司令部庁舎の瓦は、少なくとも2つの産地で構成される。一つは赤褐色釉の瓦で、安田瓦を含む越前瓦系統の窯元で焼かれ、日本海ルートで移入された瓦、もう一つは黒褐色釉の瓦で、資料に乏しいものの現状では、弘前あるいは鱒ヶ沢の窯元で焼かれた瓦と推測する。弘前あるいは鱒ヶ沢の窯元は、記録に依拠すれば安田瓦系の技術者らによって成立され、現地の材料を用いて瓦生産を始めたと推測する。堀江建築では共通してこの瓦が広く供給されていた。鱒ヶ沢で焼かれたという話があるのも、日本海ルートで入ってきた瓦の受入港であっただけでなく、日本海ルートで瓦製造に関わる技術者や雇人も入ってきたことも示そう。その背景には、急な大量生産への対応と運搬時の破損や運搬コストの抑制があったとみられる。また村元姓や辻本姓は、安田・笹神の瓦生産地では聞かないという。村元姓は津軽地域に多い。また堀江佐吉が手掛ける建造物は、津軽の職人で構成されていた。村元宇兵衛は明治37年築の旧第五十九銀行本店本館の黒褐色瓦製造にも関わっていた。以上をふまえると、村元は地元の瓦製造業者として黒褐色瓦にも関わっていたほか、瓦手配の元締め役を果たしていたと考える。

7. まとめ

本稿では、校内での遺構・出土品の発見を契機に、古写真や古文献と結びつけながら、旧制弘前

高等学校における教育、日常生活と、旧第八師団司令部・経理部庁舎建築について検討してきた。結果、教育現場における陶器の統制化から、戦後期における大学名の入った食器類へと変化がたどられた。さらに教育・軍事という場の役割をふまえつつ、古写真や古文献を参照すれば、遺構が形成された時期だけでなく、出土品の製作地や、使用者の属性、使用目的、廃棄目的までが評価できる。これらを通じて、旧制高等学校における食器・実験器具の使用実態が明らかになっただけでなく、文献に記載されることのない、学生生活を知ることができる。旧第八師団関係施設からは、軍部拡張に伴って明治後期に陸軍省の規則制定による建築物の秩序化が図られ、外観だけでなく部屋割りや仕様まで厳格になっていたことがうかがえた。一方、材料調達は地元任せられ、地元産の建築材が使われた。急激な建築材料の供給量増加は、地元における新たな産地の開拓・拡大や、新規技術の導入を促進させた。地方において中央で作成された厳格な仕様は、明治政府が目指す近代建築の統一仕様を知る機会になり建築材料の量産化にもつながった。このように、師団の増設は、軍都としての都市形成だけでなく、その基盤となる材料調達の体制整備と、地元への新技術の定着の面で津軽地域における近代化に大きな役割を果たしたといえる。

※1 「漂流乳業」(<https://www.citymilk.net/index.htm>) 2022年3月18日閲覧

※2 薄片観察ではなく外見上での判断による。柴正敏・鳥口天の両氏よりご教示。

※3 小栗康寛氏(とこなめ陶の森 学芸員)よりご教示。

※4 各地区(厚木・横浜を除く)における米軍の進駐関係―連合軍の状況、動静報告を含む― 自昭和二十年九月/(2)奥羽地区進駐関係]JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B18090046200、連合軍の本土進駐並びに軍政関係一件 第2巻(A'1.0.0.2)(外務省外交史料館)

※5 大正4年庁舎が大本営になった際の部屋割が残る(青森県1917)。これによれば、部屋割がほぼ同じであることが分かる。

※6 安田瓦は、新潟県北蒲原郡旧安田町を産地とするが、明治期には生産手法が普及拡大したため笹岡など阿賀野川流域の窯元の総称として用いる。

謝辞

立ち合い調査、および校地および工事関係の図面提供など弘前大学施設環境部と施工業者に多大なる協力を得た。出土品の図化は、筆者のほか浅野 溪、石戸谷龍生、岩瀬小夜、遠藤光新、大平紋寧、大山美樹、葛西真生、算用子眞充、菅原昌彦、谷 勇樹が行った。資料調査に際して、下記の機関・個人にご教示を賜った。末筆ながら感謝申し上げる(敬称略、五十音順)。

小栗康寛、金田直樹、佐藤孝典、柴 正敏、鳥口 天、関根達人、高瀬雅弘、田尻義了、福井敏隆、三上 豊、湊慎一郎、石川県企画振興部、石川県県民文化スポーツ部文化振興課、株式会社LIXIL INAX ライブミュージアム、旧弘前偕行社、常滑市とこなめ陶の森資料館、弘前大学附属図書館、弘前大学農学生命科学部、弘前市立図書館、弘前市立博物館、(株)堀江組、松江歴史館、安田瓦協同組合、山内石材店、陸上自衛隊弘前駐屯地防衛館、陸上自衛隊善通寺駐屯地乃木館

参考・引用文献

- 青森県 2009『青森県史 資料編 近現代5』
- 青森県内務部・編 1912『青森県商工業の状態』
- 青森県・編 1917『大正四年陸軍特別大演習青森県記録』
- 鱒ヶ沢町史編さん委員会 1984『鱒ヶ沢町史 第2巻』
- 阿部志朗 2018「近代以降の石州瓦の流通圏に関する地理学的研究」『学術研究助成報告書』第3集、(公財)国土地理協会、63-84頁
- 石川県 2018『旧陸軍 第九師団司令部庁舎・金沢偕行社 見学ツアー 資料』
- 漆山文治 1979『安田瓦の起源と沿革』安田町教育委員会
- 我満四五吉 1989『つわものの跡探訪』(私家版)
- 崎山俊雄・飯淵康一・永井康雄・安原盛彦 2005「旧陸軍省における官舎建築の供給制度と平面構成について—近代日本の官舎建築に関する歴史的研究—」『日本建築学会計画系論文集』第595号、189-196頁
- 桜井準也 2004『モノが語る日本の近現代生活 近現代考古学のすすめ』慶應義塾大学出版会
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
- 笹神村・編 2002『笹神村史 資料編三 近現代』
- 渋谷隆一・編 1984『明治期日本全国資産家・地主資料集成Ⅳ』柏書房
- 創立30周年記念誌編集委員会・編 1985『弘前大学農学部30年のあゆみ』弘前大学農学部同窓会
- 中森 勉 1990「日本の近代と建築 15 軍事施設 陸軍建築の光と影」『月刊文化財』第316号、第一法規出版、40-51頁
- 中森 勉 1995「明治後期における陸軍省『建築要領草案』にみる標準化について 師団司令部建築を例として」『日本建築学会北陸支部研究報告集』第38号、日本建築学会、483-486頁
- 井上 要 1927『日本瓦業総覧』日本瓦業総覧刊行會
- 萩谷茂行 2013「統制経済下における陶磁器製品製造、流通の一考察」『瑞浪市歴史資料集』第2集、75-156頁
- 弘前大学創立50周年記念事業実行委員会50年史編纂専門委員会・編 1999『弘前大学五十年史ビジュアル版 写真で見る弘前大学の50年 1949-1999』弘前大学
- 弘前大学創立50周年記念事業実行委員会50年史編纂専門委員会・編 1999『弘前大学五十年史』弘前大学
- 弘前大学二十年史編纂委員会・編 1973『弘前大学二十年史』弘前大学
- 弘前大学農学部同窓会 1983『弘大農学部同窓会会報』第1号
- 弘前大学農学部同窓会 1983『弘大農学部同窓会会報』第2号
- 弘前大学農学部同窓会 1984『弘大農学部同窓会会報』第3号
- 弘前大学・編 1950『弘前大学要覧』
- 舟橋 健 2015「番号の付けられたやきもの 記念銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴」『瑞浪市歴史資料集』第3集、瑞浪市陶磁資料館、1-59頁
- 船水 清 2004『棟梁堀江佐吉伝』白神書院(改訂版)
- 文化財建造物保存技術協会・編 1985『重要文化財旧第五十九銀行本店本館保存修理工事報告書』
- 文化財建造物保存技術協会・編 2019『重要文化財旧弘前偕行社保存修理工事報告書』
- 前田伊勢松 1972「笹神村と瓦」『瓦』笹神村教育委員会、4-24頁
- 美濃窯業株式会社 2002『美濃窯業社史』
- 明治乳業社史編集委員会編 1969『明治乳業50年史』明治乳業
- 森田 守 2020「国立工芸館の建築と松田権六の仕事場の移築・再生」『現代の眼 東京国立近代美術館ニュース』第635号、54・55頁
- 山内直介・編 1979『弘前高等学校写真集 大鵬われらの徽章とかざす』旧官立弘前高等学校同窓会
- 山内直介・編 1977『記念誌 北溟寮』旧官立弘前高等学校同窓会